

## 東南アジアにおける生薬の比較研究

(第Ⅷ報)<sup>†</sup>

——クチンの中薬(1)——

新田あや\*

### A Comparative Study of Crude Drugs in Southeast Asia, Part VIII

——Chinese Crude Drugs at Kuching (1)——

by

Aya NITTA

In preceding papers, about 600 Chinese crude drugs collected in Singapore were described and discussed on the basis of their origins with reference to “Yào-Cai-Xué,” (1961) and “The Gardens’ Bulletin, Vol. 6” (1930).

The present series of papers deals with Chinese crude drugs collected at Joon Ning Pharmacy, Kuching, Sarawak, East Malaysia, in 1971. Altogether 424 crude drugs were obtained, the greater part of which were of vegetable origin, the remainder being either of animal or of mineral origin. The vegetable drugs may be divided into 10 groups on the basis of their shape or their origin in the plant, e.g., bark, root, flower, etc.

About half of the drugs, 203, are described in this paper. The parts of the plants are: wood and stem (42 out of 203), bark and root bark (16), rhizome (45), root (90), and leaf (10). These are sold in certain shapes and sizes (A to F below) in accordance with either their origin in the plant or the plant species; (A) stems and roots measuring >1 cm in diameter—obliquely cut into pieces of 1–3 mm thickness, (B) bigger trunks and branched roots—chips of 3–5 mm maximum length, (C) small stems and herbs—cut into pieces of 3–7 cm length, (D) bark—lengthwise strips of 3–5 mm width are cut into pieces of 1–3 mm length, (E) stems and roots of some plant species—cut into round slices of 1 mm thickness, (F) drugs of small original size—without cutting.

Further analyses of the Chinese crude drugs of Kuching in comparison with those of Singapore will be attempted in the papers to follow.

これまでにシンガポールの中薬について5報<sup>1)</sup>にわたって記載し、それらの質的な解析、量的な分析ならびに出所についての若干の検討を加えた。

さて本報ではクチンの中薬について述べる、記載方法はすべてシンガポールの中薬の場合と

<sup>†</sup> 第Ⅷ報：新田あや，吉田集而，小島一郎：『東南アジア研究』(1975) Vol 12 (4), pp. 507~524

\* 京都大学薬学部生薬学教室

同様に行ない、まず全生薬約400品目を記載した後、同様の解析を試み、またシンガポールの中薬と比較して検討してみるつもりである。

クチンは東マレーシア、サラワク州の州都で、中国系人口は約70%を占める。<sup>2)</sup> 著者は森林保護局の Chai 技官の紹介により“永寧 (Joon Ning) 中西薬行”でとり扱っているほぼすべての中薬を入手した。ただし、シンガポールの場合と同様に麝香、蟾酥、鹿茸、燕巢、牛黄など高価で、しかも比較的よくその基原のわかっているものは除外した。全部で435品目あったが、本邦への輸送中に事故があり、消失したものが11品目(リストから生薬名はわかっている)あり、さらに若干のものは性状にいくらか変化を来たしているもので、結局手許にあるものは424品目である。

それらについて、シンガポールの中薬の場合と同様におおまかに用部別とし、生薬名とその基原あるいは性状を簡単に記述する。そして全品目を記述し終えた後に、それを資料として、薬材学および既報のマラヤの中薬群およびシンガポールの中薬群との全体的比較を行ない、検討を加えるつもりである。なお個々の生薬について、シンガポールの中薬と比較し、その異同についても記述する。

材料は直ちに使えるようにいろいろな形にカットされていることは、シンガポールの中薬の場合と同様である。カット法は中薬の種類と形状によりほぼ一定であるため、次の記号で表現し、それ以外の場合は簡単にその形状を記述することにした。

A：厚さ 1~3 mm (時に 5 mm) にの斜切片、径が約 1 cm 以上の茎・材類および根類に多い。

B：厚さ 3~5 mm, 大小不揃いなチップ状、材類および分岐部分をもった根類に多い。

C：長さ 3~7 cm, 細い茎類および全草類に多い。

D：幅 3~5 mm (時に 1 cm), 厚さ 1~3 mm の縦切片、皮類に多い。

E：厚さ約 1 mm の横断切片。

F：ほとんどカットされていないもの。ただし容器に入る程度の大きさにはなっている。

本報では茎・材類 (42), 皮類 (16), 根茎類 (45), 根類 (90) および葉類 (10) の合計203品目について述べる。

**茎・材類生薬**：材類と茎類とに分ける。材類は比較的大きい樹木の材のみからなるもので、茎類は木本性の枝、藤本茎あるいは草本茎である。基原不明のものは最後にまとめ、整理番号順に性状をやや詳しく述べる (以下各用部についても同様である)。

茎・材類生薬は根類生薬と大変まぎらわしいので、形状から判断した。たとえば髄のあるものは根という名称であっても、茎・材類に含め、どちらかわからないもの、あるいは茎・根茎、および根が混合していて、根が主なものと思われるものは根類に含めた。また葉類が混入しているものは、本来ならば全草類に含めるべきかもしれないが、慣習上、茎類に含めたものもある。すなわち用部別は、あくまで別宜上の手段であって、さして厳密なものではない。

A 材類生薬

No	生薬名	基	原	備	考
K 1	油松節	Pinus tablaeformis Carrier* or P. massoiana Lambert*	[Pinaceae]	S 21油松節に同じ。(A)	
K 2	白檀香	Santalum album L.*	[Santalaceae]	薬材学では檀香, S 22檀香柴に同じ。 (B)	
K 3	紅蘇木	Caesalpinia sappan L.*	[Leguminosae]	薬材学では苏木, S 23苏木柴に同じ。 (D)	
K 4	正沉香	Aquilaria agallocha Roxb.* or A. sinensis Merrill*	[Thymelaeaceae]	薬材学では沉香, S 25沉香に同じ, 不定形。	

\*

B 茎類生薬

No	生薬名	基	原	備	考
K 5	桑枝	Morus alba L.*	[Moraceae]	S 1 桑枝に同じ。(A)	
K 6	桑寄生	Loranthus paracitites (L.) Merrill*	[Loranthaceae]	S 34桃寄生に酷似し, K 7 桔寄生と 変らない。(C)	
K 7	桔寄生	〃		K 6 桑寄生のように葉を多く混入し ていない。(C)	
K 25	松寄生	Loranthus sp.	[Loranthaceae]	前二者と比較してやや枝が太い。 (A)	
K 8	海風藤	Hocquartia manshuriensis Nakai*	[Aristolochiaceae]	S 4 海風藤に同じ。(A)	
K 9	淮木通	Clematis montana Buch.-Ham. ex DC <sup>3)</sup>	[Ranunculaceae]	S 淮木通に同じ。(E), 常用中草药 手冊の淮通にあてる。	
K 10	清風藤	Sinomenium acutum (Thunb.) Rehd. <sup>4)</sup>	[Menispermaceae]	S 164清風藤に同じ。(C)	
K 11	剪桂枝	Cinnamomum cassia Bl.*	[Lauraceae]	薬材学では桂枝, S 28桂枝に同じ。 (E)	
K 24	血風根	Sargentodoxa cuneata (Oliver) Rehd. ex Wils.*	[Sargentodoxaceae]	薬材学の大血藤にあてる。(A)	
K 39	常山葉	Dichroa febrifuga Lour.*	[Saxifragaceae]	S 199常山茶に同じ。(C)	
K 12	石南藤	Photinia serrulata Lindl.*?	[Rosaceae]	S 7 石南藤に同じ。(C)	
K169	金英根	Rosa laevigata Mich. <sup>5)</sup>	[Rosaceae]	S 176金英根に同じ。(B)	
K 13	皂刺尖	Gleditia sinensis Lam.*	[Leguminosae]	S 6 皂刺に同じ。(A)	
K 28	老人根	Milletia reticulata Benth.*	[Leguminosae]	薬材学の昆明鶏血藤にあてる。(A)	
K 16	鳥不宿	Zanthoxylum avicennae (Lam.) DC <sup>3)</sup>	[Rutaceae]	薬材学の鳥不宿は Kalopanax pictus (Thumb.) Nakai (Araliaceae) である。 (A)	
K 14	椿根藤	Cedrela sinensis Juss. <sup>9)</sup>	[Meliaceae]	S 472椿根藤に同じ。(C)	
K338	水絲柳	Tamarix chinensis Lour.*	[Tamaricaceae]	薬材学では檉柳, 中薬通報の垂絲柳 にあてる。(C)	
K 15	瑣陽片	Cynomorium coecinum L.*	[Cynomoriaceae]	薬材学では翁陽, S 11鎖陽に同じ。 (A)	
K 17	白通草	Tetrapanax papyrifera (Hook.) K. Koch*	[Araliaceae]	薬材学では通草, S 12白通草に同じ。 (E)	
K 18	紫蘇梗	Perilla sp.	[Labiatae]	S 27蘇梗に同じ。(A)	
K 19	肉蓯蓉	Cistanche salsa Benth. et Hook. f.*	[Orobanchaceae]	S 15蓯蓉に同じ。(F)	

No	生薬名	基原	備考
K 20	双藤鈎	<i>Uncaria rhynchophylla</i> (Miq.) Jackson* or <i>U. sinensis</i> (Oliver) Haviland [Rubiaceae]	薬材学では鈎藤鈎, S16勾藤に同じ。 (C)
K 34	鷄屎藤	<i>Paederia scandens</i> (Lour.) Merrill? <sup>9)</sup> [Rubiaceae]	(A)
K 21	羞竹茄	<i>Phyllostachys nigra</i> Munro var. <i>henonis</i> Staff ex Rendle* or <i>P. reticulata</i> K. Koch* [Gramineae]	薬材学では竹茄, S18竹茄に同じであるが, これは径約3cmのボール状。
K 22	灯心花	<i>Juncus effusus</i> L.* [Juncaceae]	S19灯心花に同じであるが, ずいのみからなり長さ5~1;0cmの带状。
K 23	金釵斛	<i>Desmotrichum</i> sp. [Orchidaceae]	扁平な葉状体を有するが, この形質は <i>Dendrobium</i> と <i>Desmotrichum</i> を区別する点である。 <sup>7)</sup> 高橋らはこれと同じ形質の唐石斛に <i>Dendrobium plicatile</i> Lindl. をあてているが, その形質に関する詳細な記載を行っていない。 <sup>8)</sup> (C)

No	生薬名	形状
K 26	有沉香	(B) 黄色材片で, 極めて多孔質で軽く, 縦裂しやすい。ほとんど香がない。品質的に劣る沈香類ではなかろうか。
K 27	紅心栝	(B) 表皮は灰かつ色, 断面の皮部はかつ色でコルク質, 木部は黄白色, 多孔質で偽年輪があり, 質は極めて軽い。
K 29	懸檔根	(A) 径2~3cm, 表皮は黄色でコルク化しているが, 時に剝落している。断面の皮部はかつ色で, 木部は黄かつ色, きめがこまかい。偽年輪はやや不明瞭である。
K 30	紅小娘	(A) 径7~20mm, 外表は灰かつ色で縦紋があり, 断面の皮部はかつ色であり厚くない。木部は黄かつ色で, 全体に多孔質, 偽年輪があり, 軽く破碎しやすい。
K 31	川馬胎	(A) 径2~3cm, 皮部および表皮は黒かつ色で縦紋があり, 数面の不部は黄白色, 放射線は明瞭, 年輪がある。S26川馬胎とは異なる。
K 32	布驚根	(A) 径1~2cm, (時に5cm), 表皮は明るいかつ色で横凸紋があり, 数面の皮部は黄色, 木部は類白色で, 偽年輪がある。
K 33	吊風根	(A) 径1~2cm, 表皮は灰かつ色で縦紋があり, 断面の皮部は紅かつ色, 木部は黄色, 皮部に近い部分は多孔質, かつ色の髄がある。
K 35	川山龍	(A) 木質藤本茎, 径約3cm, 厚さ約5mm, 表皮は灰かつ色で, 横凸紋があり, 断面の皮部は紅かつ色で厚く, 木部は黄かつ色, かつ色の放射線は明瞭, 道管小孔は皮部に近い部分ほど密に分布する。虫害による小孔がある。S168川山龍とは同名異物と思われる。
K 36	虱麻根	(A) 径5~10mm, 表皮は淡黄かつ色で, こまかい縦紋がある。断面の皮部は表皮よりやや色が淡く, 木部は黄白色, ち密で, 淡かつ色のずいがある。
K166	毛桃根	(A, B) 径約1cm (時に3mm), 長さ約3cmの枝とチップ(2×2×0.5cm <sup>3</sup> )からなる。わずかに付着している表皮は黄かつ色ないし黄土色で, こまかい縦紋があり, 断面は黄白色で, 枝には髄がある。
K174	牽牛根	(A) 径6~10mm (時に2cm), 厚さ2~5mm, 表皮は黄かつ色ないしかつ色で縦裂紋および刺あるいは刺の残基と思われるコルク質の突起がある。断面は黄白色で, 中央に小さい髄がある。

皮類生薬：主に幹皮, 時に根皮を含む。

No	生薬名	基原	備考
K 37	春白皮	<i>Betula utilis</i> D. Don <sup>9)</sup> [Betulaceae]	S47春根皮, S552栲白皮に同じ。 (C)

新田：東南アジアにおける生薬の比較研究（第Ⅷ報）

No	生薬名	基	原	備	考
K 38	桑白皮†	<i>Morus alba</i> L.*	[Moraceae]	S 35桑白皮に同じ。(D)	
K 39	粉丹皮†	<i>Paeonia suffruticosa</i> Andrew*	[Ranunculaceae]	S 36牡丹皮にほぼ同じ。(A), 根皮。	
K 40	羌厚樸	<i>Magnolia officinalis</i> Rehd. et Wils.*	[Magnoliaceae]	薬材学では厚樸, S 474川朴根にほぼ同じ。(D)	
K 41	紫根皮	<i>Kadsura peltigera</i> Rehd. et Wils.*?	〃	薬材学の柴荆皮にあてておく。(F)	
K 42	玉桂皮	<i>Cinnamomum</i> sp.	[Lauraceae]	桂皮碎, S 550桂皮とは種が違ふと思われる。(F)	
K 43	南玉桂	<i>Cinnamomum</i> sp.	〃	筒状, Viet-Nam 産という, 前者ともやや異なる。(F)	
K 44	川杜仲	<i>Eucommia ulmoides</i> Oliver*	[Eucommiaceae]	薬材学では杜仲, S 37杜仲に同じ。長さ 5 mm にカット	
K 45	海桐皮	<i>Erythrina indica</i> L.*?	[Leguminodae]	S 39, S 551海桐皮とは異なる。(D)	
K 46	川黄柏	<i>Phellodendron amurense</i> Rupr.* or <i>P. sachalinense</i> Sargent*	[Rutaceae]	薬材学では黄柏, S 40黄柏に同じ。(F)	
K 47	白朮皮†	<i>Dictamnus dasycarpus</i> Turcz.*	〃	薬材学では白蘇皮。S 46白朮皮に同じ。(F)	
K 48	遠志肉†	<i>Polygala tenuifolia</i> Willd.*	[Polygaraceae]	S 129遠志に同じ。根皮のみ。(F)	
K 52	鴨脚皮	<i>Schefferella octophylla</i> [Lour.] Harms <sup>9)6)</sup>	[Araliaceae]	S 45鴨脚皮に同じ。(F)	
K 49	北秦皮	<i>Fraxinus bungeana</i> DC* or <i>F. rhyrachophylla</i> Hemsl.*	[Oleaceae]	S 42秦樹皮に同じ。(D)	
K 50	五加皮	<i>Periploca sepium</i> Bunge*	[Asclepiadaceae]	S 41五加皮に同じ。(F)	
K 51	川地骨†	<i>Lycium chinense</i> Miller*	[Solanaceae]	薬材学では地骨皮。S 43地骨皮に同じ。(F)	

† 根皮

根茎類生薬：主に単子葉植物からなるが、シダ類や特定の双子葉植物も含まれる。

No	生薬名	基	原	備	考
K 53	金狗背	<i>Cibotium barometz</i> (L.) J. Smith*	[Dicksoniaceae]	薬材学やは金毛狗背。S 50金狗背に同じ。(A)	
K 54	骨碎補	<i>Drynaria fortunei</i> (Kuntze) J. Smith*	[Polypodiaceae]	S 51碎骨補に同じ。(A)	
K 55	川大黃	<i>Rheum palmatum</i> L.	[Polygonaceae]	薬材学では大黃。S 52大黃に同じで軽質。(A)	
K 56	藕節片	<i>Nelumbo nucifera</i> Gaertn.*	[Nymphaeaceae]	S 53藕節に同じ。(E)	
K 57	川葛蒲	<i>Anemone altaica</i> Fischer*	[Ranunculaceae]	薬材学では九節葛蒲。S 69川昌莢に同じ。(F)	
K 58	正雲連	<i>Coptis teeta</i> Wallich* or <i>C. chinensis</i> Franch.*	〃	薬材学によれば云南産黄連をいい、その基原植物は <i>C. teetoides</i> C. Y. Cheng である。それは径約 2 mm, 長さ 2~3 cm で根は少なく、やや小形である。しかし本生薬はこの記載に一致せず、径 3~5 mm, 長さ 2~4 cm と大形で、多数の細根を伴っている。野黄連（野生品）または家黄連（栽培品）と思われる。S 56黄連よりやや大形。(F)	
K 59	川蓮粉	〃	〃	粉末汚黄色, 味は極めて苦い。	

No	生薬名	基	原	備	考
K 60	元胡片	Corydalis ambigua (Pallas) Chamisso etSchlecht.* or C. bulbosa DC*	[Papaveraceae]	S 58元胡に同じと思われるが、これは類白色。(E)	
K 61	酒川芎	Ligusticum wallichii Franch.*		S 60川芎に形状は同じ。(A), 酒浸後蒸煮品と考えられる。	
K 62	羌活	Notopterygium incisum Ting* or N. forbesii Boiss.*	[Umbelliferae]	S 61羌活にはほぼ同じ。(D)	
K 63	胡黄连	Picrorrhiza Kurroa Royle*	[Scrophulariaceae]	S 63番胡連に同じ。(F)	
K 64	香甘松	Nardostachys chinensis Batalin*	[Valerianaceae]	薬材学では甘松香, S 64甘松に同じ。(F)	
K 65	炒蒼朮	Atractylodes lancea (Thunb.) DC*	[Compositae]	加熱加工品。S 65茅蒼朮と同基原と思われる。(A)	
K 66	飯白朮	Atractylodes macrocephala Koidz.*	//	薬材学では白朮。S 66白朮に同じ。(A)	
K 67	建澤舎	Alisma plantago-aquatica L. var. orientale Samuelsson*	[Alismataceae]	S 98一舎に同じ。(E)	
K 68	蘆竹根	Phragmites communis (L.) Trinius*	[Gramineae]	薬材学では蘆根。S 483芦竹根に同じ。(C)	
K 69	白茅根	Imperata cylindrica (L.) Beauvois var. major Nees	//	S 67毛根に同じ。(C)	
K 70	京三稜	Scirpus yagara Ohwi*	[Cyperaceae]	薬材学では京三稜。S 62三稜片に同じ。(A)	
K 71	香附子	Cyperus rotundus L.*	//	S 64四香附に同じ。(F)	
K 72	石菖蒲	Acorus gramineus Solander*	[Araceae]	S 70石菖蒲に同じ。(D)	
K 73	南星	Arisaema ambiguum Engler* or A. japonica Bl.*	//	S 72南星に同じ。(A, E)	
K 74	周胆星	//	//	S 463胆星と同じ加工品と思われる。(F)	
K 75	半夏	Pinellia ternata Breiter* (=P. tuberifera Tenore)	//	S 95法下茶に同じ。(E)	
K 76	羌半下	//	//	S 74半夏に同じ。特殊加工品。(E)	
K 77	宗詞下	//	//	S 73上半夏と同じ加工品と思われる。(F)	
K 95	千年建	Homalomena saggitaeifolia Jungh.?	//	S 93千年健に同じ。薬材学では原植物未詳。(D)	
K 78	肥知母	Anemarrhena aspholoides Bunge*	[Liliaceae]	薬材学では知母, S 75知母片に同じ。(D)	
K 79	明玉竹	Polygonatum officinale Allioni*	//	S 76玉竹に同じ。(D)	
K 96	川玉竹	//	//	S 559玉竹条に同じ。(F)	
K 80	酒黄精	Polygonatum sibiricum Reboute* ほか同属植物	//	特殊加工品(酒浸など)。(F)	
K 81	土茯苓	Smilax glabra Roxb. var. concolor (C.H. Weight) Wang et Tang*	//	S 77土茯苓に同じ。(A, E)	
K 82	粉只貝	Fritillaria verticillata Willd. var. thunbergii Baker*	//	薬材学では浙貝母。S 79浙貝母に同じ。(F)	
K 83	仙茅根	Curculigo orchioides Gaertn.*	[Hypoxidaceae]	薬材学では仙茅。S 81天仙茅に同じ。(A)	
K 84	淮山角	Dioscorea batatas Decaisn.*	[Dioscoreaceae]	薬材学では山药。S 82淮山に同じ。(A)	
K 85	川草薺	Dioscorea tokora Makino*	//	薬材学では川草薺。S 83川草薺に同じ。(A)	

No	生薬名	基	原	備考
K 86	川射干	<i>Belamcanda chinensis</i> (L.) DC*	[Iridaceae]	薬材学では射干。S 84川射干に同じ。(A, D)
K 87	香三奈	<i>Kaempferia galanga</i> L.*	[Zingiberaceae]	薬材学では三奈。S 85香三奈に同じ。(E)
K 88	蓬莪朮	<i>Curcuma zedoaria</i> (Bergius) Roscoe*	//	薬材学では莪朮。S 86 朮片に同じ。(A)
K 89	北羌黄	<i>Curcuma longa</i> L.*	//	薬材学では姜黄, S 87姜黄に同じ。(F)
K 90	北干姜	<i>Zingiber officinale</i> Roscoe*	//	薬材学では干姜。S 88北干姜に同じ。(A, E)
K 92	老羌皮 <sup>9)</sup>	//	//	S 89老薑皮に同じ。根茎の皮のみ。(F)
K 91	黑羌炭 <sup>10)</sup>	//	//	加熱加川品である。(F)薬材学には老羌皮や黑羌炭は記載されていない。
K 93	高良姜	<i>Alpinia offinarum</i> Hance*	//	S 90高良姜に同じ。(A)
K 94	粉白芨	<i>Bletilla striata</i> (Thunb.) Rechenbach f.*	[Orchidaceae]	薬材学では白芨。S 91新白芨とほぼ同じ。(F)

**根類生薬**：茎・材類か根類か明瞭ではない生薬や、根茎および根からなる生薬、あるいはさらに茎まで含む生薬があり、はじめに述べたように便宜上各用部に組み入れ、残ったものをすべて根類生薬とした。ただし基原不明の生薬についてはここに入れるのは適当でないものもあるであろう。また用部ちがいで同名の生薬は品質と関係があると思われるが、一方名称は習慣上であったりして一概にはいえないこともある。

No	生薬名	基	原	備考
K 97	麻黄根	<i>Ephedra sinica</i> Stapf <sup>9)</sup>	[Ephedraceae]	S 170麻黄根に同じ。(A)
K 98	胡椒根	<i>Piper</i> sp.	[Piperaceae]	S 188胡椒根とほぼ同じ。 <sup>5,9,11)</sup> (A)
K164	地錦根	<i>Morus alba</i> L. <sup>12)</sup>	[Moraceae]	(C)。
K 99	北細辛	<i>Asarum heteropoides</i> Fr. Schmidt var. <i>mandschuricum</i> (Maxim.) Kitag.*?	[Aristolochiaceae]	S 101細辛に類似する。(C)
K100	山慈茹	<i>Asarum</i> sp.	//	(C)。
K101	何首烏	<i>Polygonum multiflorum</i> Thunb.*	[Polygonaceae]	S 102首烏片に同じ。(A)
K102	淮牛七	<i>Achyranthes bidentata</i> Bl.*	[Amaranthaceae]	薬材学では牛膝。S 106淮牛七に同じ。(C)
K103	川牛七	<i>Cyathula capitata</i> Miq.*	[Ranunculaceae]	S 108川牛七に同じ。(A)
K104	富商陸	<i>Phytolacca esculenta</i> van Hout.*	[Phytolaccaceae]	薬材学では商陸。S 107 商陸片に同じ。(A)
K106	威灵仙	<i>Clematis chinensis</i> Osbeck*	[Ranunculaceae]	S 109威灵仙に同じ。(A, C)
K107	焙附片	<i>Aconitum chinensis</i> Paxton*	//	S 111焙附片に同じ。(A)
K108	生川烏	//	//	S 561生川烏に同じ。(F)
K109	川烏片	//	//	S 113川烏に同じ。(A)
K110	生草烏	<i>Aconitum</i> sp.	//	S 562生草烏に同じ。(F)
K111	草烏片	//	//	S 114草烏に同じ。(A)

No	生薬名	基	原	備	考
K112	白附片	<i>Aconitum koreanum</i> R. Raymond* [Ranunculaceae]			S 71白附子とほぼ同じ。薬材学でいう関白附子にあてたが、これは中国東白産であるから、やや疑問が残る。そのほかに白附子に対し <i>Typhonium giganteum</i> Engler (Araceae) 独角蓮をあてることもあるが、本品はアルカロイド反応が陽性であるため、 <i>Typhonium</i> 属でなく、 <i>Aconitum</i> と推定される。(A)
K113	炒酒芍	<i>Paeonia lactiflora</i> Pallas* "			本品は酒浸後、加熱加工されたものと考えられる。S 118 抗白芍は単に表皮を除き、乾燥したものである。(A)
K114	漢防己	<i>Stephania tetrandra</i> S. Moore* [Menispermaceae]			S 120 汗防己に同じ。径 2~3 cm, 厚さ約 2 mm の半円形。
K115 K116	台烏薬	<i>Lindera strychnifolium</i> Villas* [Lauraceae]			S 128 台烏薬に同じ。(E)
K173	山蒼根	<i>Litsea cubeba</i> Persoon "			S 577 山蒼根とほぼ同じであるが、径が大きい。(A)
K118	黒地榆	<i>Sanguisorba officinalis</i> L.* [Rosaceae]			S 123 地榆根に同じ。(A)
K119	苦参根	<i>Sophora flavescens</i> Aiton* [Leguminosae]			S 124 苦参根に同じ。(A)
K120	粉干葛	<i>Pueraria pseudo-hirsuta</i> Tang et Wang* "			S 125 干葛とほぼ同じであるが、品質はやや劣ると思われる。(A)
K121	北烏芪	<i>Astragalus mongholicus</i> Bunge* "			S 127 黄芪に同じ。(A)
K122	粉甘草	<i>Glycyrrhiza uralensis</i> Fisch.* "			S 126 甘草とはカット法が異なる。(A)
K123	山豆根	<i>Sophora subprostrata</i> Chun et T. Chen* "			薬材学によれば中国産山豆根には 3 種類があり、そのうち生産量も多く、品質も良好で、华南および東南アジアへ輸出されているといわれている基原植物をあてておく。これは广西産で、植物名を廣豆根といわれているが、それを確認していない。(A)、他の 2 種類は (1) <i>Menispermum dahuricum</i> DC (Menispermaceae), 和名コウモリカズラ、中国東北、华北などに産し、藤本性、(2) <i>Indigofera fortunei</i> DC (Leguminosae), 江苏省徐州産で、主として中国国内で消費されるといわれている。
K175	牛大力	<i>Millettia speciosa</i> Champ. <sup>3)</sup> [Leguminosae]			S 165 牛大力 (根類) に同じ。(A)
K162	牛郎根	<i>Millettia speciosa</i> Champ.? "			K 175 牛大力よりやや細い根からなる。(A)
K172	地風根	<i>Millettia cf. congestiflora</i> T.C. Chen* "			S 470 地風根とほぼ同じ。(A)
K171	一条根	<i>Flemingia congesta</i> Roxb.? "			S 190 一条根とほぼ同じであるが、やや太い。(A)
K124	高麗人參	<i>Panax schinseng</i> Nees* (= <i>P. ginseng</i> C.A. Meyer) [Araliaceae]			(F)
K125	洋参 (广东人參)	<i>Panax quinquefolium</i> L.* "			S 131 洋参に同じ。(F)
K126	洋参	" "			径 1~2 mm のいわゆるひげにんじんである。(F)
K127	北防風	<i>Ledebouriella seseloides</i> Wolff* [Umbelliferae]			S 132 に同じ。(A)
K128	明党参	<i>Changium smyrnioides</i> Wolff* "			S 133 明党参に同じ。(F)

No	生薬名	基	原	備	考
K129	北柴胡	<i>Bupleurum falcatum</i> L.*	[Umbelliferae]	S 134柴胡に同じ。(A, C)	
K130	北砂参	<i>Glehnia littoralis</i> Schmidt* (= <i>Phellopterus littoralis</i> Benth.)	//	S 135に同じ。(C)	
K131	川槲本	<i>Ligusticum sinensis</i> Oliver* and <i>Ligusticum</i> sp.	//	S 136川高本に同じであるが、やや小さい。2種類の混合物である。 <sup>13)</sup> (F)	
K132	川独活	<i>Heracleum hesleyanum</i> Mich.* or <i>H. lanatum</i> Mich.*	//	薬材学によれば独活の正品の基原植物として2種類があげられているが、そのほかに附註にさらに2種類ある。本生薬は香があまりないことから <i>Angelica pubescens</i> Maxim. (Umbelliferae)—正品— <i>Angelica dahurica</i> (Fisch.) Benth. et Hook. および <i>Aralica cordata</i> Thumb. (Araliceae)—附注の2種類—とは考えられない。(A) S 137独活は芳香が強く、おそらく <i>Angelica pubescens</i> Maxim. と思われる。	
K133	香白芷	<i>Angelica anomala</i> Lallem.*	//	薬材学によれば白芷の正品の基原植物として2種類、さらには5種類があげられている。本生薬は虫害がひどいので同定は困難であるが、芳香があることおよび断面が繊維性であることからひとまず正品のひとつにあてておく。(A) <i>Angelica dahurica</i> (Fisch.) Benth. et Hook.—正品—は粉質で、外形は一見山薬状を呈するため合致しない。また附注の <i>A. formosanum</i> Boiss. (浙江産), <i>A. yabeana</i> Makino (= <i>A. genuflexa</i> Nutt. <sup>14)</sup> ) (大叶芍药), <i>Heracleum scabridum</i> Franch (糙白芷), <i>H. lanatum</i> Mich. (毛白芷), <i>Peucedanum decursivum</i> Maxim. (= <i>A. decursiva</i> (Mig.) Fr. et Sav. <sup>15)</sup> ) (紫花前胡) なども香、根の性状などが本生薬と一致しない。S 138香白芷, S 569白芷は <i>A. dahurica</i> (Fisch.) Benth. et Hook. と考えられる。	
K134	当帰頭	<i>Angelica sinensis</i> (Oliver) Diels* (= <i>A. polymorpha</i> Maxim. var. <i>sinensis</i> Oliver)	//	S 141当帰頭に同じ。(F)	
K135	当帰尾	//	//	S 142当帰尾に同じ。(F) シンガポールではこれらの生薬に等級があったが、 <sup>1)</sup> ここでは等級はみられず、品質はほぼ中品と思われた。	
K136	信前胡	<i>Peucedanum praeruptorum</i> Dunn*	//	S 139前胡に同じ。(A)	
K137	龍胆草	<i>Gentiana scabra</i> Bunge*	[Gentianaceae]	S 143竜胆草に同じであるが、やや細い。(F)	
K138	川秦艽	<i>Gentiana macrophylla</i> Pallas*	//	S 144秦艽とは形状が異なる。すなわち本生薬は繊維性の残茎と径2~3 mmの細根からなる、一方シンガポールのものは細根がなく、主根の皮部のみからなる板状を呈する。	
K139	白前根	<i>Cynanchum stauntoni</i> (Decaisne) Han.-Mazz.*	[Asclepiadaceae]	S 145白前根とほぼ同じであるが、シンガポールのものは根茎が相当量混入している。(C)	
K140	白薇草	<i>Cynanchum atratum</i> Bunge*	//	S 572白眉(微)根とほぼ同じであるが、クチンのものは綿毛を密生した茎葉が混入している。(F)	

No	生薬名	基	原	備	考
K141	川黄芩	Scutellaria baicalensis Georgi*	[Labiatae]	S 149黄芩に同じ。(A)	
K142	黒元参	Scrophularia ningpoensis Hemsl.*	[Scrophulariaceae]	S 147元参に同じ。(A)	
K143	生地黄	Rehmania glutiosa (Gaertn.) Liboschitz*	〃	S 148生地にはほぼ同じ。(F)	
K144	熟地黄	〃	〃	特殊加工品で、生地黄よりやや小さい。(F)	
K145	巴戟肉	Morinda officinalis How.*	[Rubiaceae]	S 151巴戟にはほぼ同じ。(F) 通常“肉”とは本部を除去した皮部のみをいうが、本生薬では本部も付着したままである。	
K146	紅茜根	Rubia cordifolia L.*	〃	S 152紅茜根より細く、S 189入骨丹によく似ている。(C)	
K178	黄枝根	Gardenia florida L. <sup>9)</sup> →G. jasminoides Ellis <sup>16)</sup>	〃	S 473黄枝根に同じ。(B)	
K147	川續断	Dipsacus japonicus Miq.*	[Dipsacaceae]	S 153續断に同じであるが、やや細い。(A)	
K148	天花粉	Trichosanthes kirilowii Maxim.*	[Cucurbitaceae]	S 179天花粉に同じ。(A)	
K149	津桔梗	Platycodon grandiflorum (Jacq.) DC*	[Campanulaceae]	S 155桔梗に同じ。(A)	
K140	潞党参	Codonopsis pilosula Naunfeldt*	〃	S 156潞党参に同じ。(C)	
K151	防党	Codonopsis pilosula Naunfeldt*?	〃	S 159防党にはほぼ同じ。(A), 药材学によれば上甯省武都付近産のものに酒を噴霧した後、蒸して内面が黒変したものを防党という記載されているが、本生薬の内面は類白色である。しかしながら組織は固く、熱加工を受けていると思われる。	
K153	北紫苑	Aster tataricus L.f.*	[Compositae]	S 157北子苑に同じであるが、やや細い。(F), 药材学によれば産地によって基原植物が異なる。すなわち A. ageratoides var. heterophylla Maxim. (西紫苑, 陝甘寧盆地産), Liguralia fischeri Turcz. (Compositae) (東北遼寧, 吉林産), Ranunculus chinensis Bunge (Ranunculaceae) (黒龍江省産) であるが、ひとまず産地から最も可能性のあるものをあてておく。	
K154	廣木香	Saussurea lappa Clarke*	〃	S 158木香に同じ。(A)	
K155	川藜蘆	Raponticum uniflorum (L.) DC*	〃	S 160漏芦根に同じ。(F)	
K156	大小針	Cirsium sp. <sup>3)</sup>	〃	S 171大小薊にはほぼ同じ。(F)	
K117	赤升麻	Serratula chinensis S. Moore*?	〃	S 54升麻, S 184緑升麻にはほぼ同じ。(D)	
K157	川百部	Stemona tuberosa Lour.*	[Stemonaceae]	S 161川百部に同じ。(A) 药材学によればそのほかに3種が記載されている。S. sessilifolia (Miq.) Franch. (直立百部), S. japonica Miq. (百部, 蔓性百部, 本草綱目の正品), S. ovata Nakai. これらはいずれも紡錘根がやや小型であるから、本生薬には一致しない。	

新田：東南アジアにおける生薬の比較研究（第Ⅷ報）

No	生薬名	基原	備考
K158	麦門冬	<i>Ophiopogon japonicus</i> (Thunb.) Ker-Gawler*? [Liliaceae]	S162麦冬にほぼ同じ。(F) 薬材学によればそのほかに <i>Liliope</i> 属のものが数種類記載されている。 <i>L. spicata</i> Laur. (Liliaceae) (土麦冬, 江苏省ほか各地), <i>L. graminifolia</i> Baker (大叶麦冬), <i>L. minar</i> Makino (小麦冬), <i>L. platyphylla</i> Wang et Tang (闊叶麦冬), これら <i>Liliope</i> 属および <i>Ophiopogon</i> 属の塊根をすべて麦門冬と称すると思われる。
K159	明天冬	<i>Asparagus cochinchinensis</i> (Lour.) Merrill* "	S163天冬と同物であるが, 形状が異なる。(下), シンガポールのものはローラーにかけて薄く伸展されているが, クチンのものは径約1cm, 長さ5~6cmの紡錘根である。この形状により古来から百部と混同されている。
K150	元金片	<i>Curcuma zedoaria</i> (Berg.) Roscoe* or <i>Curcuma longa</i> L.* [Zingiberaceae] <i>Curcuma aromatica</i> Salisb.*	S97川一金に同じ。(A)

No	生薬名	形状
K105	銀柴胡	(F) 径7~13mm, 長さ5~7cmの円柱状の根で, 表皮は暗かっ色で縦溝があり, 破折面の木部はかっ色を呈し, 折れやすい。本生薬は戦前には日本市場においてみられなかったが, 藤田らによる台湾市場品の簡単な解剖図 <sup>17)</sup> があり, それにほぼ同じものと思われる。
K152	安党参	(F) 径7~10mm, 長さ15mm前後にカットされている。表皮は淡黄かっ色で, 環紋があり, 断面は暗かっ色で菊花様の紋様である。軽質で破碎しやすい。他の党参類は質がち密で, 粉質であるので, 本生薬は同属基原とは考えられない。
K161	油麻根 (甲)	(A) 径5~13mm, 太いものは厚さ3mm 細いものは程5cm度に斜切されている。表皮は灰かっ色で, 縦紋あるいは縦じわがあり, 断面の皮部はかっ色, 木部は黄かっ色で, 硬い。
K163	秤生根	(B) 大きさはほぼ3×5×0.5cm <sup>3</sup> , 皮部はかっ色で薄く, 木部は類白色で硬い。虫害がある。
K165	老蟹目	(A) 径1~2cm, 厚さ2~5mm, 皮部は灰かっ色で, やや繊維性であり, 薄い。断面の木部は淡かっ色から淡黄かっ色で硬く, 皮部のすぐ内側にはこまかい縦紋がみられる。
K176	苦櫛根	(B) 大きさは幅1~2cm, 長さ2~4cm, 厚さ2~5mmのチップ状。皮部はほとんどなく, 木部の色は黄かっ色で, 偽年輪がある。極めて軽い。
K168	檣梔根	(B, A) 大部分は10×7×3mm <sup>3</sup> のチップからなる。皮部は黒かっ色から黒色で, 縦紋があり, 断面の木部はかっ色から紅かっ色で重点で硬い。
K170	檣邦根	(C, A) 径2~5mm, 長さ5~7cmの根と, 径約1cm, 厚さ2~5mmの飲片からなる。表皮は暗かっ色で, 太いものは粗い縦じわがあり, 細いものは縦じわおよび約1cm間隔で横裂紋がある。断面の木部は黄かっ色, 細いものを破折すると皮部は分離しやすい。
K176	一斗金	(F) 径10~15mm, 表皮は黄かっ色からかっ色で, 外表を剥皮した形跡がある。断面は黄褐色で, ずい線はかっ色で, 明瞭である。
K177	京傘根	(A) 茎, 根茎および根のほぼ等量混合物からなる。茎は径5~10mm, 表皮は黄かっ色で縦じわがあり, 断面は淡かっ色で, 中央にかっ色のずいがある。根茎は径約1cmで, ところどころに節がある。根は3~10mm(時に2cm)で, 表皮はともに灰黒色と呈する。
K179	香黄根	(B) 大きさは長さ2~4cm, 幅1~3cm, 厚さ5~10mm, 木部は黄白色, わずかに付着している表皮は黄土色から黒かっ色で, 粗い縦紋がある。

葉類生薬：大部分は形状をそのまま保っているが, 中には自然に破碎されたものもある。一般に葉類生薬は形状から全草類と品質的に関連する。すなわち本来葉類生薬であるが, 品質の劣るものは全草類生薬とな

る。ここでは茎の混入したものはほとんどすべて後に述べる全草類に含めることとし、葉のみからなる生薬をとりあげた。

No	生薬名	基	原	備	考
K180	側柏葉	<i>Biota orientalis</i> (L.) Endl.*	[Cupressaceae]	S 193側柏に同じ。	
K181	黒側柏	〃	〃	加熱加工品。	
K182	冬桑葉	<i>Morus alba</i> L.*	[Moraceae]	S 194桑葉に同じ。	
K183	荷連葉	<i>Nelumbo nucifera</i> Gaertn.*	[Nymphaeaceae]	幅 5~7 mm に刻んだもの。S 195荷連葉と同物であるが、シンガポールのは径 3 cm, 長さ 5 cm の俵状。	
K184	枇杷葉	<i>Eriobotrya japonica</i> Lindl.*	[Rosaceae]	S 197枇杷葉に同じ。	
K185	人參葉	<i>Panax japonicus</i> C.A. Meyer*?	[Araliaceae]	基原植物としてチクセツニンジンの葉があげられているが、 <i>Panax ginseng</i> C.A. Meyer オタネニンジンほか同属の葉も使われていると思われる。	
K186	双芽茶	<i>Acer ginnala</i> Maxim. <sup>18)</sup>	[Aceraceae]	S 207桑芽茶に同じ。	
K187	雲南茶	<i>Camellia sinensis</i> Kuntze*	[Theaceae]	S 198雲南茶に同じ。	
K188	綿茵陳	<i>Artemisia argyi</i> Léveil et Vaniot* (= <i>A. vulgaris</i> var. <i>incana</i> Maxim.)	[Compositae]	S 201折艾葉に同じ。	
K189	醋折艾	<i>Artemisia capillaris</i> Thunb.*	〃	S 394綿茵陳(全草類に含めたが)に同じ。 K188綿茵陳とK189醋折艾の2品目は薬材学に記載された生薬名と基原植物の関係が逆になっている。	
K190	淡竹葉	<i>Lophatherum gracile</i> Brongn.*	[Gramineae]	S 202淡所葉に同じ。	

<謝 辞>

終わりにのぞみ、本研究を御鞭達下さった京都大学名誉教授上尾庄次郎先生に深謝いたします。あわせて本研究の調査に協力いただいたクチン森林保護局 P. Chai 技官ならびに出国に際し便宜をはかって下さった京都大学木島正夫、宇野豊三両教授に謝意を表します。

<引 用 文 献>

- 1) 新田あや, ほか: 『東南アジア研究』(1972-3) Vol. 9, 597-614, Vol. 10, 105~120, 335~350, Vol. 11, 107~129, 256~266.
- 2) R. Chander: "Banchi Pendudok dan Perumahan Malaysia," Jabatan Perangkoan Malaysia,, Kuala Lumpur, 1970
- 3) 『常用中草薬手』(1970)
- 4) 中国医学院薬物研究所等編(1960)『中薬志 I, Ⅲ』
- 5) D. Hooper: "Gardens Bulletin" (1929-30) Vol. 6, 1-165
- 6) 張宏達, ほか(1957)『植物生態学与地植物学資料叢刊, 第17号, 雷州半島の植被』
- 7) 木村康一: 『上海自然科学研究所集報』(1936~7) Vol. 6, 1~60, 7, 11~46.
- 8) 高橋真太郎ほか: 『生薬学雑誌』(1965), Vol. 19, 13~24

- 9) G. A. Stuart: 1911 "Chinese Materia Medica Vegetable Kingdom,"
  - 10) 劉亜農（民国25年）『古今薬物別名考』
  - 11) R. N. Chopra *et al.* (1956) "Glossary of Indian Medicinal Plants,"
  - 12) 四川中薬研究所編（1971）『四川常用中草薬』
  - 13) 木島正夫ほか：『生薬学雑誌』（1973）Vol. 27, 129-134
  - 14) M. Hiroe, L. Constance (1958) "Umbelliferae of Japan,"
  - 15) 大井次三郎（1953）『日本植物誌』
  - 16) J. D. Hooker, B. D. Jackson (1895) "Index Kewensis an enumeration of the genera and species of flowering plants" Vol. I, II.
  - 17) 藤田直市, 木村康一：『薬学雑誌』（1928）Vol. 48, 264-276
  - 18) 中国科学院植物研究所南京中山植物園薬用植物組編（1959）『江苏省植細薬材誌』
- \* 南京薬学院薬材学教研組編（1960）『薬材学』